

速報版

Benesse® 教育研究開発センター
Benesse Educational Research and Development Center

第3回 子育て生活基本調査

小学生・中学生の保護者を対象に

社会環境の変化は、
保護者の子育てにどのような
影響を与えているのだろうか。

Benesse教育研究開発センターでは、2007年9月に保護者の子育て生活の実態、しつけや教育に関する意識をとらえることを目的に調査を実施しました。1998年、2002年に続き今回で3回目になるこの調査では、首都圏の小学1年生～中学3年生までの子どもをもつ約7,300名の保護者にご協力いただきました。調査の結果から、学年による子育ての状況の違いをみることができます。また、第1回と第2回の調査結果と比較することにより、経年での変化をとらえることもできます。このように経年で行う大規模な調査は少なく、保護者の子育てに関する意識と実態の変化を読み取る貴重なデータであるといえます。この速報版では、調査結果のなかからいくつかのデータを抜粋してご紹介します。

調査概要

調査テーマ

小・中学生をもつ保護者の子育て生活の実態、しつけや教育に関する意識

調査方法

学校通しによる家庭での自記式質問紙調査

調査時期

第1回調査 1998年12月 第2回調査 2002年9月 第3回調査 2007年9月

調査対象

【1998年調査(第1回調査)】

首都圏(東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県)の小学3年生から中学3年生の子どもをもつ保護者4,718名(配布数8,380通、回収率56.3%)。

※分析は母親(4,475名)のみを対象とした。

【2002年調査(第2回調査)】

首都圏(東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県)の小学1年生から中学3年生の子どもをもつ保護者6,512名(配布数9,038通、回収率72.1%)。

※分析は母親(6,085名)のみを対象とした。

※第1回調査との比較を行う場合は、小学3年生から中学3年生の母親(4,896名)のデータを用いた。

※第2回調査では、比較群として地方都市、および地方郡部でも調査を行った。今回の分析には含めていない。

【2007年調査(第3回調査)】

首都圏(東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県)の小学1年生から中学3年生の子どもをもつ保護者7,282名(配布数9,962通、回収率73.1%)。

※分析は母親(6,770名)のみを対象とした。

※第1回調査との比較を行う場合は、小学3年生から中学3年生の母親(5,315名)のデータを用いた。

調査項目

子育ての悩み・気がかり／しつけや教育の情報源／子どもの日ごりの様子や生活習慣／子育てで心がけていること／家庭の教育方針／配偶者との関係／子どもの家庭学習の様子／学習へのかかわり／子どものメディアの利用／子どもの休日の過ごし方／学校の取り組み・指導に対する満足度／学力観・勉強観／希望する進学段階／習い事・塾／教育費／子育ての楽しさ

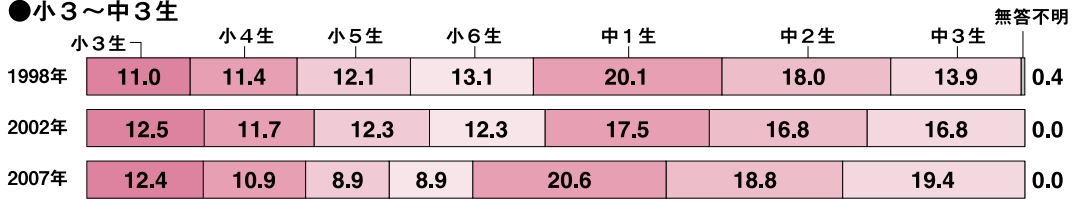
分析の枠組みとサンプル数

調査年	合計	小1生	小2生	小3生	小4生	小5生	小6生	中1生	中2生	中3生	学年不明
1998年調査	4,475名			492名	510名	543名	585名	901名	806名	621名	17名
2002年調査	6,085名	577名	610名	612名	573名	604名	603名	858名	823名	823名	2名
2007年調査	6,770名	728名	709名	659名	580名	475名	474名	1,094名	1,000名	1,033名	18名

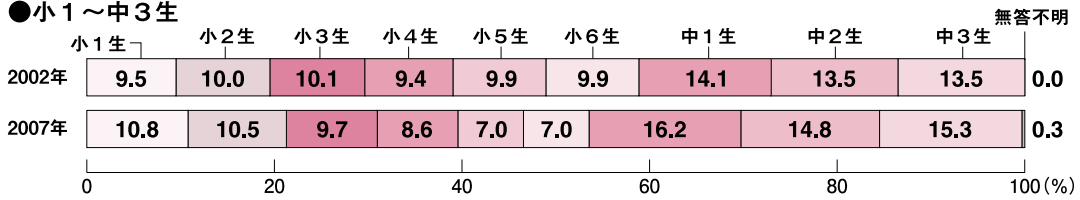
基本属性

①子どもの学年

●小3～中3生

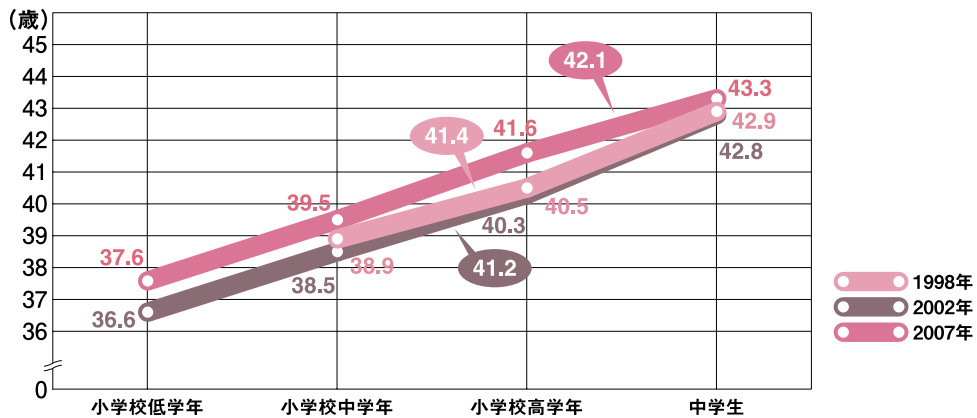


●小1～中3生



注 1998年は小1～小2生の保護者を調査対象に含めていない。

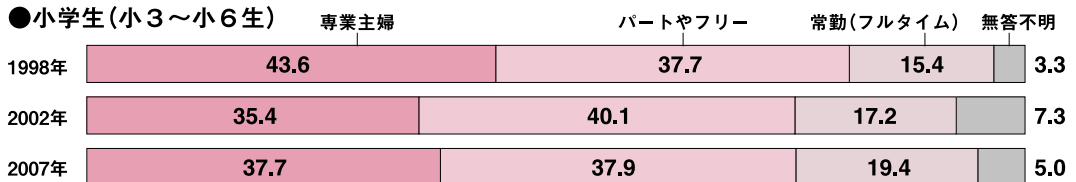
②母親の平均年齢



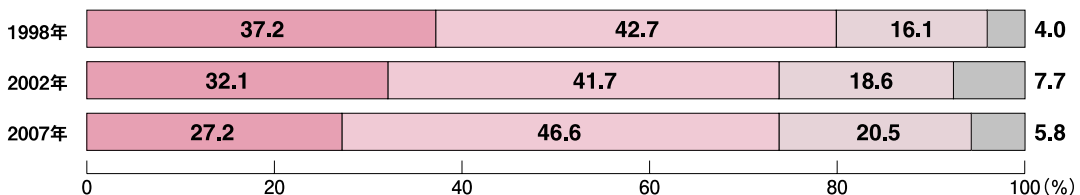
注 吹き出しは、小3～中3生をもつ母親全体の平均年齢。

③母親の就業状況

●小学生(小3～小6生)



●中学生(中1～中3生)



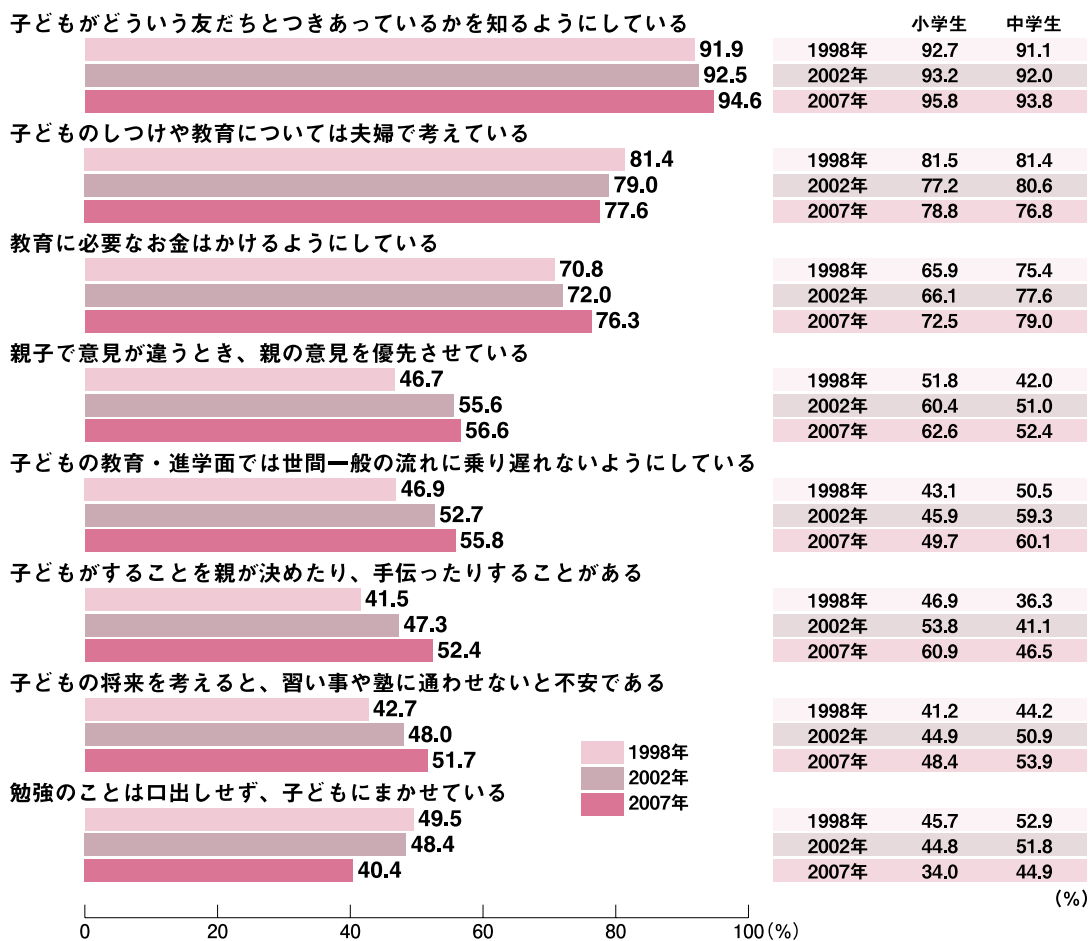
教育方針

「習い事や塾に通わせないと不安である」という母親が9年間で継続的に増え、「勉強のことは口出しせず、子どもにまかせている」という回答が減少している。

Q

あなたのご家庭ではお子様のしつけや教育について、次のようなことがどのくらいあてはまりますか。

図1-1 家庭の教育方針



注1 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

注2 左図は小3～中3生の数値。

注3 右表の「小学生」は小3～小6生、「中学生」は中1～中3生の数値。

家庭の教育方針についてたずねたところ、「子どもの教育・進学面では世間一般の流れに乗り遅れないようにしている」「子どもの将来を考えると、習い事や塾に通わせないと不安である」を肯定する比率が、9年間で9ポイント程度増加した。教育に対する不安が高まっていることがわ

かる。さらに、「勉強のことは口出しせず、子どもにまかせている」を肯定する比率は減り、「親子で意見が違うとき、親の意見を優先させている」は増加している。子どもの教育に対する母親の関与が強まっている様子がうかがえる。

学力観・勉強観

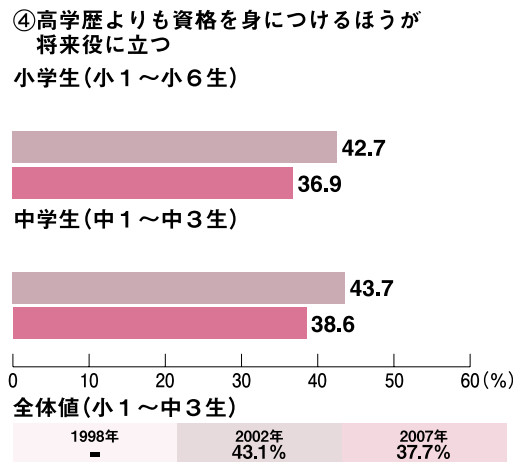
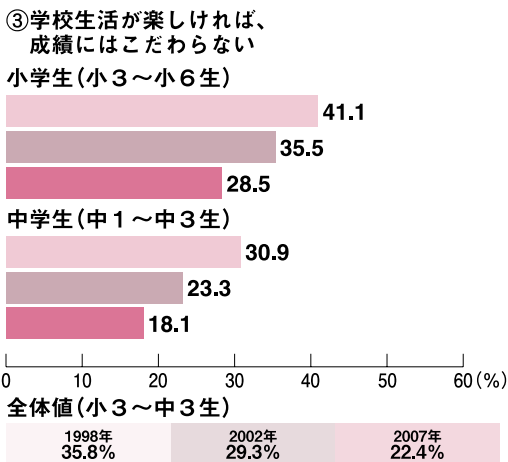
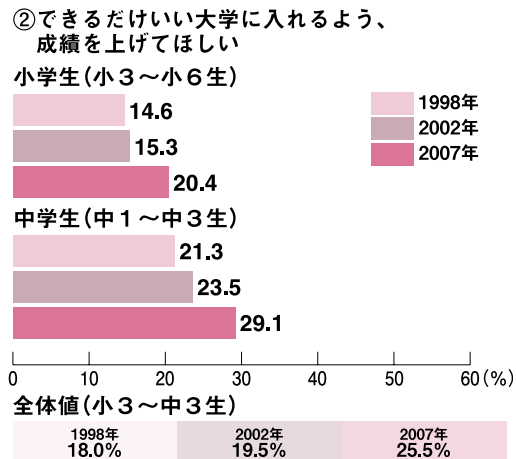
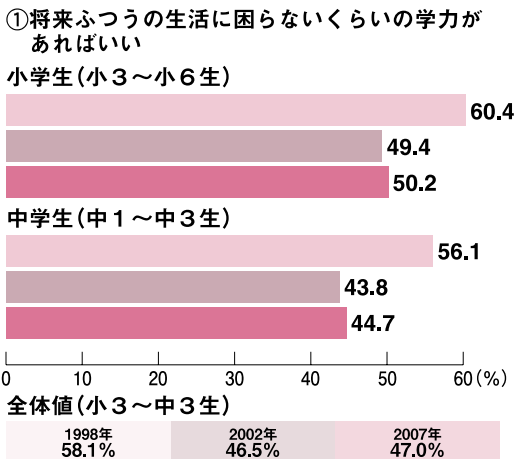
「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい」という回答が増える一方で、「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない」という意識は弱まっている。



お子様の「学力や勉強」についてどのようにお考えですか。

図2-1 学力観・勉強観

page 5



注1 複数回答。10の選択項目のうち4項目を図示した。

注2 ④は、1998年は該当質問項目なし。

「将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない」は、1998年と比べて選択される比率が全体値で10ポイント以上低下した。また、「高学歴よりも資格を身につけるほうが将来役に

立つ」も、2002年から全体値が5ポイント以上低下している。その一方で、「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい」という比率が上昇しており、成績や学歴にこだわる母親が増えているようだ。

希望する進学段階

「四年制大学まで」「大学院まで」を希望する比率の合計は、1998年の56.9%から2007年には60.2%とわずかに増加している。



あなたは、将来、お子様をどの段階まで進学させたいとお考えですか。

図3-1 希望する進学段階

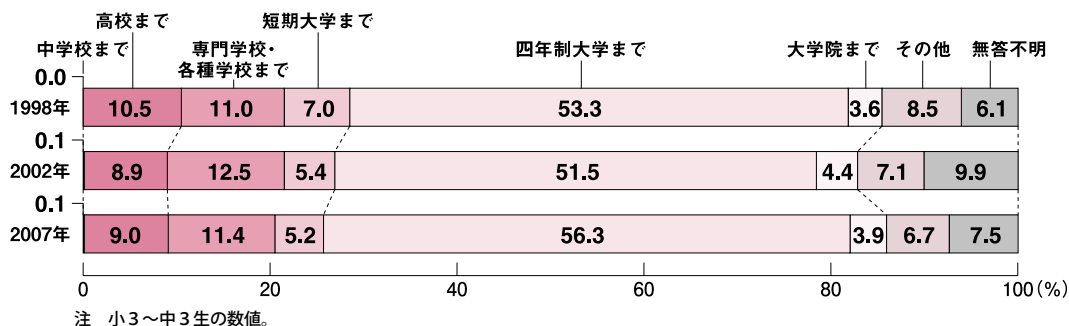


図3-2 希望する進学段階(2007年 性別)

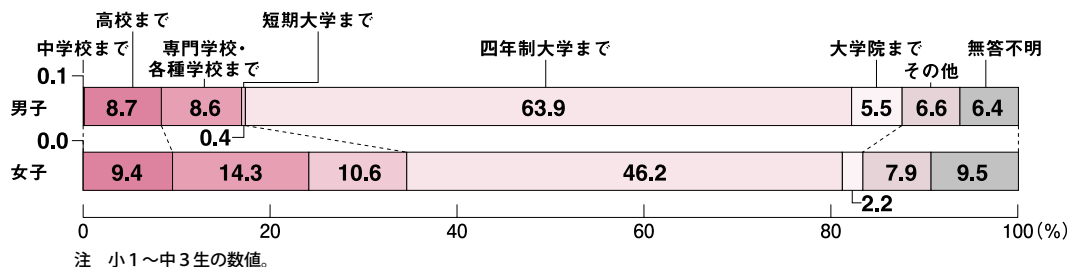
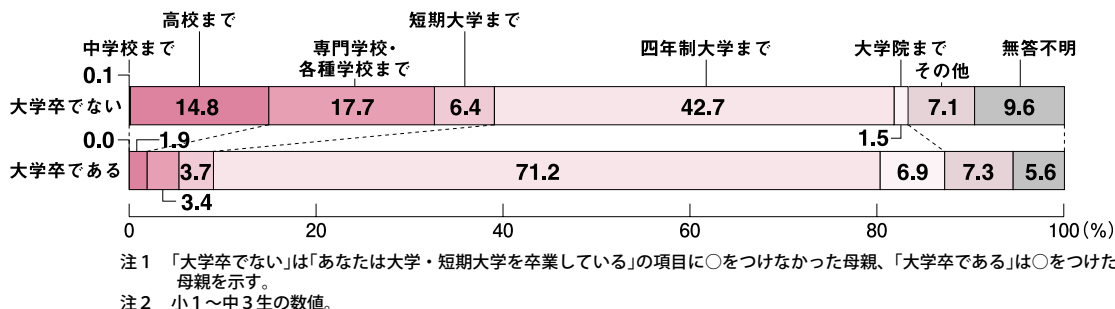


図3-3 希望する進学段階(2007年 母親学歴別)



大学卒業以上(四年制大学まで+大学院まで)の学歴を期待する比率は、1998年56.9%、2002年55.9%から、2007年は60.2%とわずかに増加した。性別で「四年制大学まで」の比率をみると、男子は63.9%、女子は46.2%である。母親は、男

子により高い学歴を期待していることがわかる。母親の学歴による違いでは、大学卒の母親のおよそ8割が、子どもにも大学卒業以上の学歴を期待している。

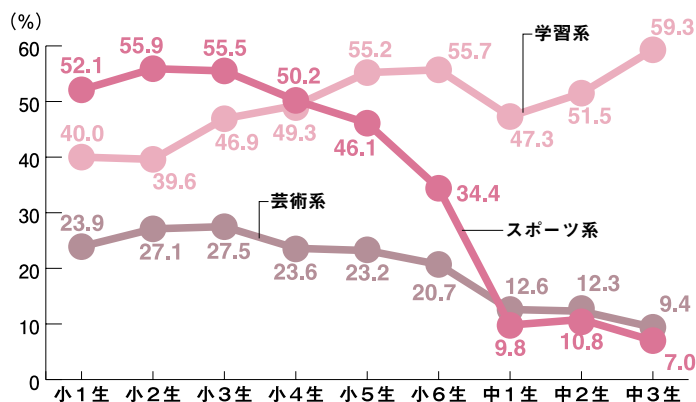
習い事・塾

小4生以上の学年では、5～6割程度が学習系の習い事をしている。1998年からの変化をみると、スポーツ系が増え、芸術系の習い事が減っている。



お子様の「塾や習い事」についてうかがいます。
今現在しているものすべてに○をつけてください。

図4-1 現在している習い事・塾(2007年 種類別・学年別)



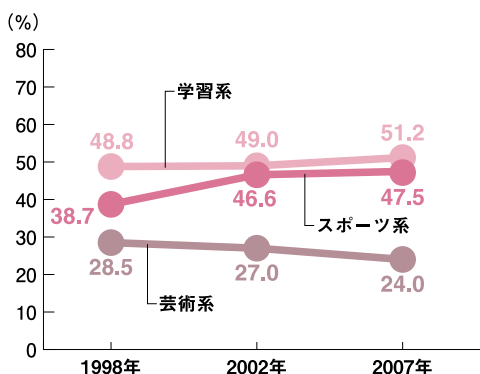
注1 複数回答。18項目からあてはまるものを選択。

注2 学校以外の塾・習い事などを利用したことがないと回答した母親を含めた、すべての母親の回答を母数としている。

注3 「スポーツ系」は「スイミングスクール」「スポーツクラブ・体操教室」「地域のスポーツチーム」から最低1つ、「芸術系」は「楽器」「音楽教室」「絵画教室や造形教室」から最低1つ、「学習系」は「定期的に教材が届く通信教育」「受験のための塾」「補習塾」「計算・書きとりなどのプリント教材教室」「家庭教師」から最低1つを選んだ%。

図4-2 現在している習い事・塾(種類別・学校段階別)

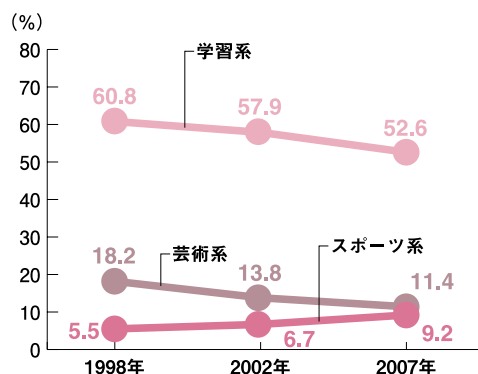
①小学生(小3～小6生)



注1 複数回答。18項目からあてはまるものを選択。

注2 習い事・塾の分類は図4-1と同様。

②中学生(中1～中3生)



注1 複数回答。18項目からあてはまるものを選択。

注2 習い事・塾の分類は図4-1と同様。

小学校の低学年のうちにはスポーツ系の習い事の比率がもっとも高いが、学年が上がるとともに減少し、中学生では1割前後になる。学年が上がるとともに増えるのは学習系の習い事で、小4生以上はほぼ半数の子どもがしている。時系

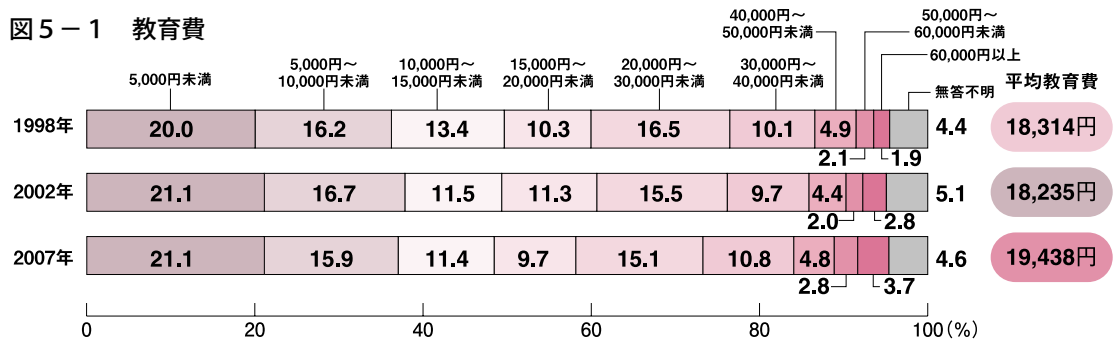
列の変化をみると、スポーツ系の習い事は小・中学生ともに増加している。これに対して、芸術系の習い事は減少している。学習系の習い事は、小学生では1998年よりも増加しているが、中学生では減少する傾向がみられた。

教育費

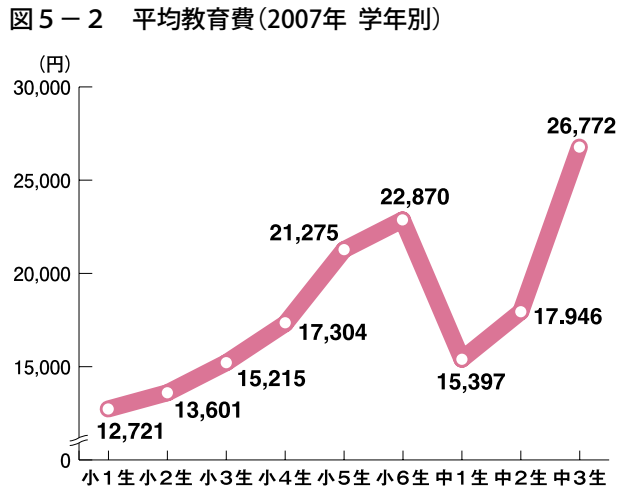
教育費の平均額は2002年から1,203円増えた。また中学受験について「受験させる」家庭と「受験させない」家庭との間で差が開いている。

Q 学校での費用を除いた、1か月にかかる習い事、通信教育、塾、レッスン料などの費用の合計を教えてください。

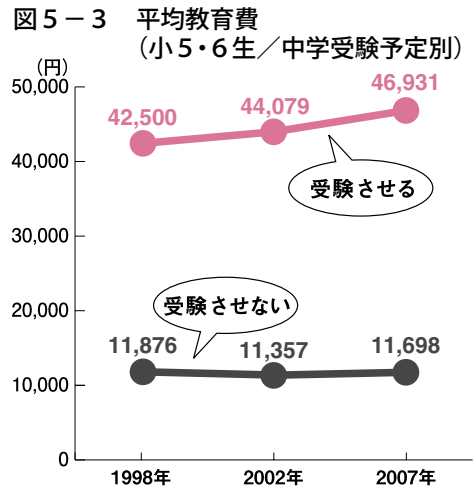
教育費の支出が増加している



注1 小3～中3生の数値。
 注2 「今までに学校以外の塾や習い事、スポーツクラブ、通信教育・教材などを利用したことがありますか」という質問に対する「いいえ」との回答については、「5,000円未満」とした。
 注3 1人あたりの平均教育費は「5,000円未満」を2,500円、「5,000円～10,000円未満」を7,500円、「60,000円以上」を65,000円のように置き換えて、無答不明を除いて算出した。



注 1人あたりの平均教育費の算出方法は図5-1と同様。



注1 「お子様に中学受験をさせますか」の質問に対する回答別に集計。「まだ決めていない」の回答は省略した。
 注2 1人あたりの平均教育費の算出方法は図5-1と同様。

教育費の平均額は、2007年は19,438円で2002年に比べて1,203円増加した。30,000円以上支出している比率も、1998年19.0%→2002年18.9%→2007年22.1%と、わずかに増加している。学年別では、中3生(26,772円)がもっとも支出が多く、小6生(22,870円)、小5生(21,275円)と続く。

また、中学を「受験させる」場合は、「受験させない」場合の4倍以上教育費を支出している。しかも、1998年と比べて、中学を「受験させる」家庭では支出を増やしているのに対して、「受験させない」家庭は横ばいで、両者の差が開いている。

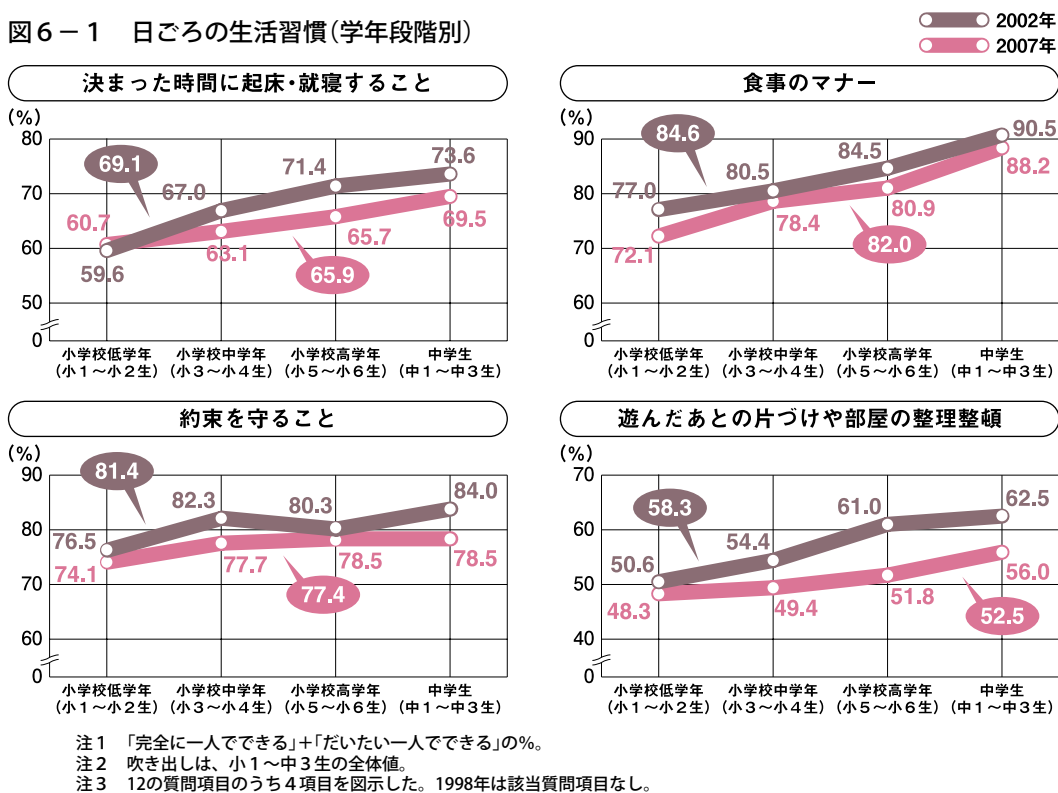
日ごらの生活習慣

生活習慣に関するさまざまな項目で、子どもが「一人でできる」という回答が減少している。また、子どもの自立に対する母親の満足度も低下している。

Q

お子様は、次のようなことを自分一人できますか。

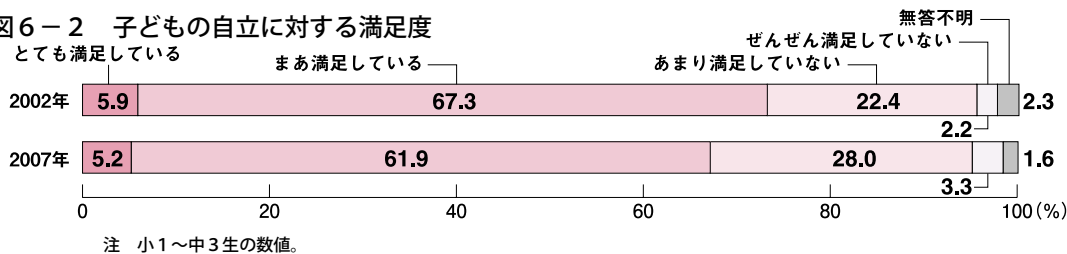
図6-1 日ごらの生活習慣(学年段階別)



Q

お客様の「生活習慣や自立の状況」について全体として満足していますか。

図6-2 子どもの自立に対する満足度



子どもの基本的な生活習慣についてたずねたところ、ほとんどの項目で「一人でできる」(完全に一人でできる+だいたい一人でできる)の比率が低下している。生活習慣の定着が十分でないという認識を、母親たちは強めているようだ。

このことを反映してか、子どもの自立に対する満足度も低下している。「満足している」(とても満足している+まあ満足している)の比率は2002年の73.2%から6.1ポイント低下し、2007年は67.1%となった。

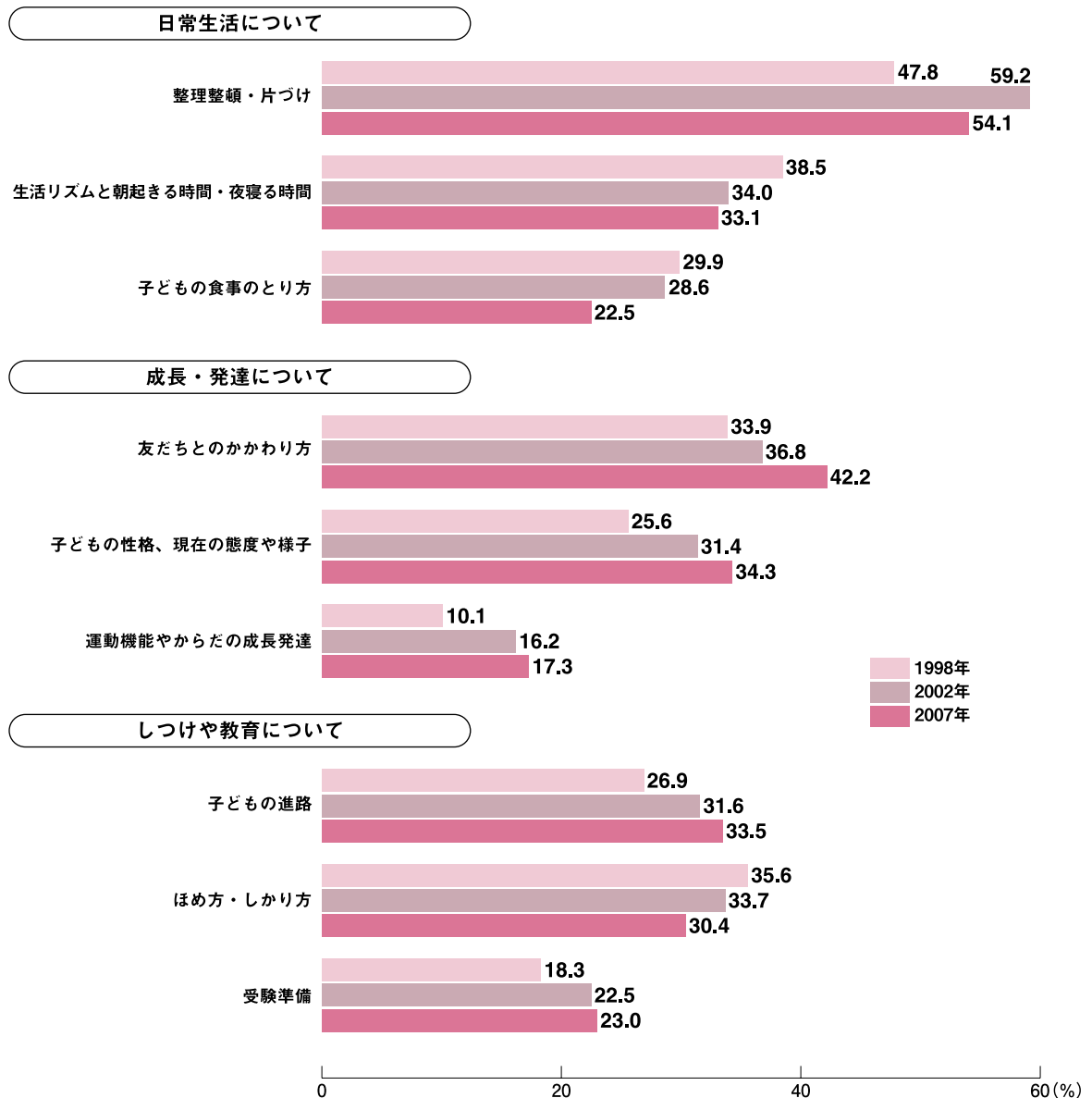
悩み・気がかり

「子どもの食事のとり方」「生活リズムと朝起きる時間・夜寝る時間」の悩みが減少している。一方で、「子どもの進路」や成長・発達に関する悩みの比率が増加した。

Q

お子様やあなたご自身のことについて、次のような「悩みや気がかり」がありますか。

図7-1 子育ての悩み・気がかり



注1 複数回答。

注2 経年での比較が可能な29項目のうち、9項目を図示した。

注3 小3～中3生の数値。



悩みや気がかりの中で、現在もっとも気にかかっていることはどのようなことですか。

表7-1 一番の気がかり(2007年 学年段階別)

	小学校低学年 (小1~小2生)	小学校中学年 (小3~小4生)	小学校高学年 (小5~小6生)	中学生 (中1~中3生)	(%)
1位	犯罪や事故に巻き込まれること 18.9	犯罪や事故に巻き込まれること 15.3	犯罪や事故に巻き込まれること 13.6	子どもの進路	11.5
2位	友だちとのかわり方 9.0	友だちとのかわり方※ 7.8	受験準備 8.2	犯罪や事故に巻き込まれること	9.9
3位	ほめ方・しかり方 7.6	子どもの性格、現在の態度や様子※ 7.8	友だちとのかわり方 7.4	受験準備	7.0
4位	子どもの性格、現在の態度や様子 6.4	ほめ方・しかり方 5.0	子どもの進路 6.8	勉強の成績	6.2
5位	しつけの仕方 4.9	整理整頓・片づけ 4.7	子どもの性格、現在の態度や様子 5.7	友だちとのかわり方	5.9
6位	仕事と家庭の両立★ 3.8	子どもの進路 3.6	子どもの教育費 4.3	子どもの教育費	5.0
7位	子どもの食事のとり方 3.3	家庭学習の習慣 3.5	家庭学習の習慣 4.2	家庭学習の習慣	4.8
8位	こころの健康★ 3.2	しつけの仕方 3.3	ほめ方・しかり方 3.6	子どもの性格、現在の態度や様子	4.5
9位	整理整頓・片づけ 3.1	子どもの食事のとり方 3.2	こころの健康★ 3.2	携帯電話やパソコンの使い方	4.0
10位	子どもの教育費 人間関係★ 2.9	人間関係★ 3.1	整理整頓・片づけ 3.0	整理整頓・片づけ からだの健康★ 2.8	2.8

注1 38項目から1つ選択。
 注2 ★印は母親自身の悩みや気がかり。
 注3 ※印は同率2位。
 注4 上位10項目のみを表示した。

悩みや気がかりでは、「子どもの食事のとり方」「生活リズムと朝起きる時間・夜寝る時間」などの生活習慣に関連する項目は、全般的に比率が下がっている。これと反対に、「子どもの性格、現在の態度や様子」「友だちとのかわり方」といった成長・発達にかかわる項目や、「子どもの進路」「受験準備」など学習に関する項目の一部

は、9年間で比率が高まった。一番の気がかりをみると、「犯罪や事故に巻き込まれること」の比率が全学年を通じて高いことがわかる。学年が上がるにつれて、生活に関する項目が少なくなり、学習にかかわる項目が上位にランクされるようになる。

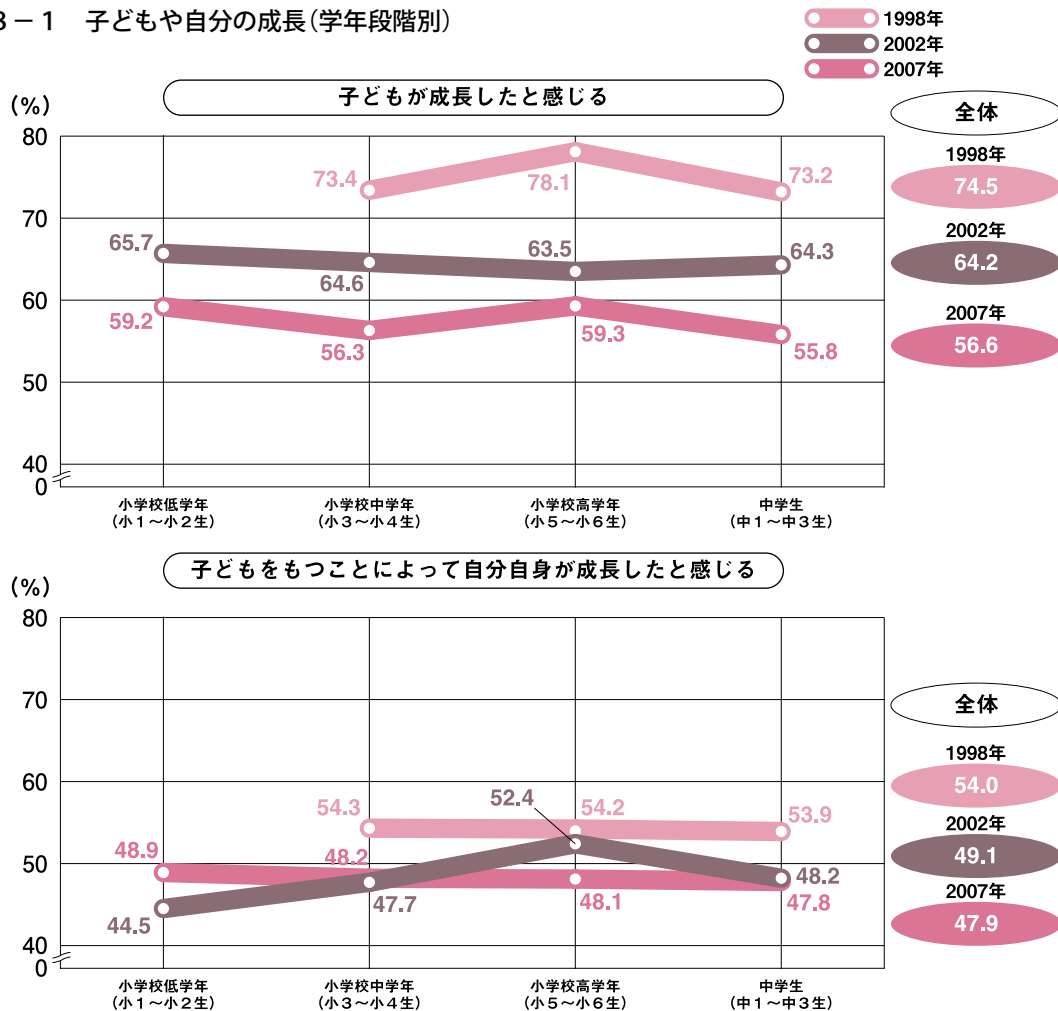
子どもや自分の成長

「子どもが成長したと感じる」「子どもをもつことによって自分自身が成長したと感じる」に対して「よくある」と回答する割合が、9年前と比べて減少している。

Q

あなたは日頃の生活の中で、以下のようなことがどれくらいありますか。

図8-1 子どもや自分の成長(学年段階別)



注1 「よくある」の%。

注2 1998年は、小学校低学年(小1~小2生)の保護者を調査対象に含めていない。

注3 「全体」は小3~中3生の数値。

日ごろの生活の中で「子どもが成長したと感じる」ことがあるかたずねたところ、「よくある」と回答する比率が大きく低下している。1998年は全体の74.5%が「よくある」と回答していたが、2007年は56.6%となり、17.9ポイントも下がっている。同様に、「子どもをもつことによって自

分自身が成長したと感じる」も「よくある」と回答する母親が減少し、全体の数値も9年間で6.1ポイント低下している。子育てのなかで、子どもや自分の成長を実感する機会が減っているようだ。

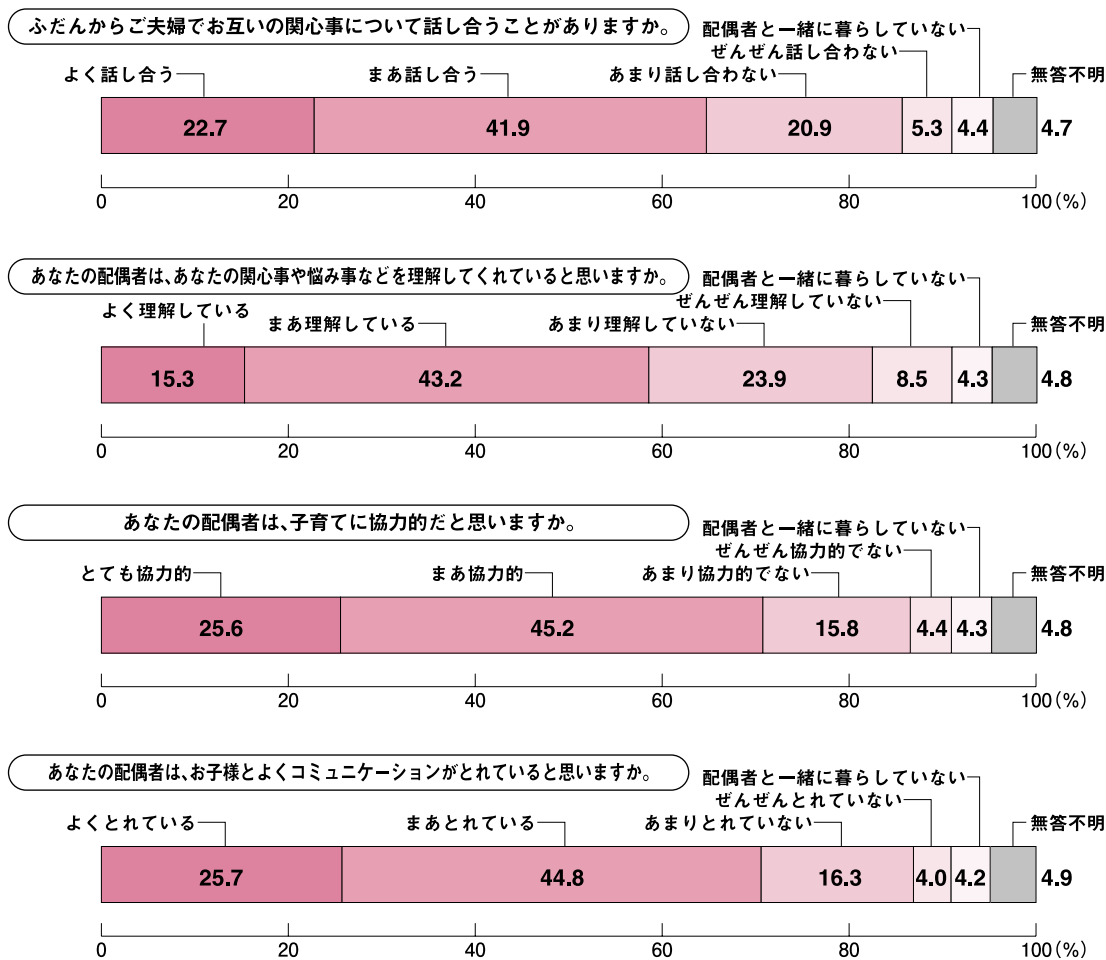
配偶者との関係

配偶者が子育てに協力的かをたずねたところ、7割の母親が肯定している。しかし、自分自身の関心事や悩み事を配偶者が「理解している」という回答は58.5%にとどまる。



配偶者(お子様の父親)についてうかがいます。

図9-1 配偶者との関係(2007年)



注 小1～中3生の数値。

配偶者が子育てに協力的かをたずねたところ、70.8%が「協力的」(とても協力的+まあ協力的)と回答している。しかし、ふだんから夫婦でお互いの関心事について話し合うかについては、「話し合う」(よく話し合う+まあ話し合う)が64.6%で、肯定率が少し低い。さらに、あなたの関心事や悩み事を理解してくれていると思うか

という質問に対しては、「理解している」(よく理解している+まあ理解している)が58.5%で、6割を下回る。配偶者が子どもとコミュニケーションがとれているかという質問では、70.5%が「とれている」(よくとれている+まあとれている)と回答しており、母親からみた父子関係はおおむね良好のようだ。

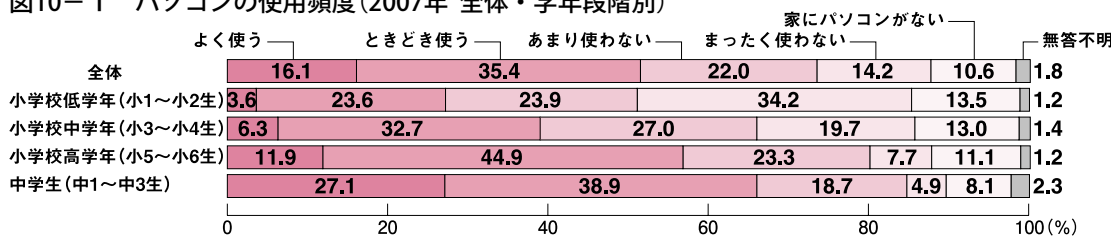
メディアの利用

小学校高学年になると、家庭でパソコンを使用する割合は5割を超える。また、携帯ゲーム機は、全体で6割を超える子どもが使っている。

Q

お子様は、家でパソコンをどれくらい使っていますか。

図10-1 パソコンの使用頻度(2007年 全体・学年段階別)

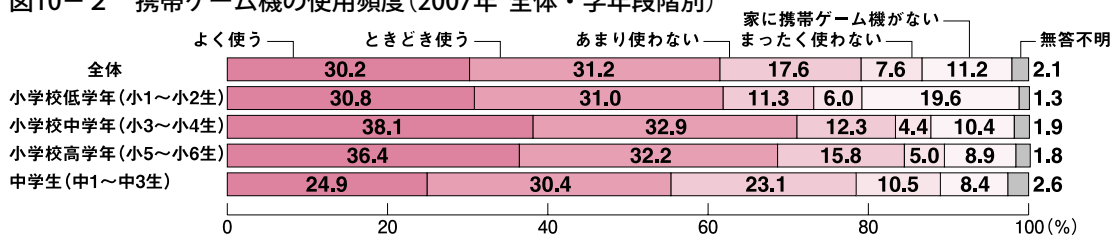


注 全体は小1~中3生の数値。

Q

お子様は、携帯ゲーム機をどれくらい使っていますか。

図10-2 携帯ゲーム機の使用頻度(2007年 全体・学年段階別)

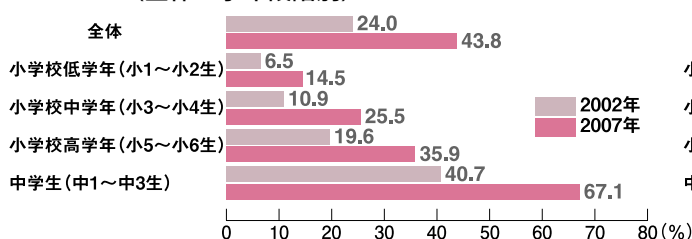


注 全体は小1~中3生の数値。

Q

次のことについて、あなたのご家庭ではまることはありますか。

図10-3 子どもの携帯電話の所有(全体・学年段階別)

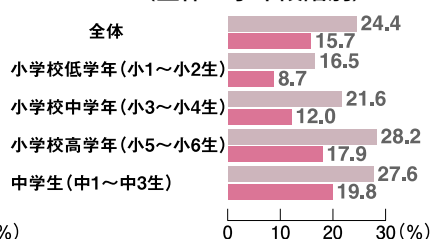


注1 複数回答。

注2 全体は小1~中3生の数値。

注3 1998年は該当質問項目なし。

図10-4 子ども専用のテレビの所有(全体・学年段階別)



注1 複数回答。

注2 全体は小1~中3生の数値。

注3 1998年は該当質問項目なし。

子どもが家でパソコンを「使う」(よく使う+ときどき使う)と回答しているのは、小学校低学年では3割弱だが、学年が上がるとともに増加し、中学生になると6割を超える。携帯ゲーム機の使用については、小学校中学年の「使う」割合が7割と最も高いが、中学生では6割を下回

る。携帯電話と子ども専用のテレビの所有について、2002年と2007年を比較すると、携帯電話の所有は全体で19.8ポイント増加したのに対して、子ども専用のテレビの所有は全体で8.7ポイント減少しており、小・中学生を取り巻くメディア環境が大きく変化しているようだ。

7割の母親が、学校の取り組みに満足
9割弱の母親が、子育てを楽しんでいる

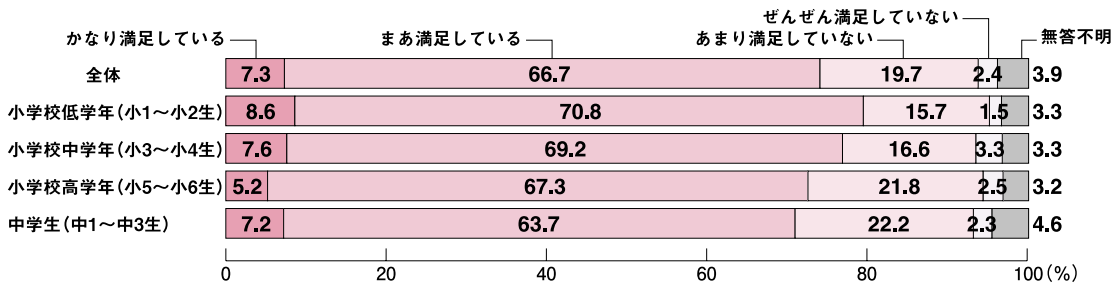
学校に対する満足度

どの学年段階でも7割を超える母親が学校の取り組みに満足している。しかし、学年段階が上がるにつれて、満足度は低下する傾向がある。



総合的にみて、あなたは学校の取り組みや指導にどのくらい満足していますか。

図11-1 学校の取り組みや指導の総合満足度(2007年 全体・学年段階別)



全体でみると学校の取り組みや指導に対し、74.0%の母親は「満足している」(かなり満足している+まあ満足している)と回答している。ただし、「かなり満足している」という回答は1

割に満たない。学年段階別にみると、満足度は小学校低学年で一番高く、学年が上がるにつれて低くなる。

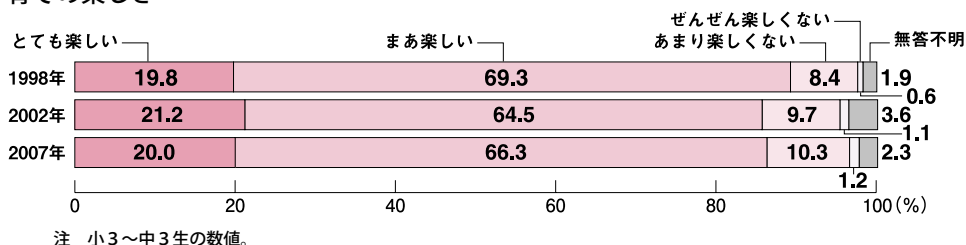
子育ての楽しさ

9年前と比較すると「楽しい」と答える割合はわずかに減少しているが、9割弱の母親は子育てを楽しんでいる。



あなたは毎日の子育てが楽しいですか。

図12-1 子育ての楽しさ



毎日の子育てについて「楽しい」(とても楽しい+まあ楽しい)と回答する母親は、1998年の89.1%と比べて2.8ポイント減少し、2007年は

86.3%となっているが、9割弱の母親は子育てを楽しんでいる。

Benesse教育研究開発センターより

第3回子育て生活基本調査

小学生・中学生の保護者を対象に

調査結果の大きな特徴として、高まる母親の教育不安があげられます。教育政策やメディア環境など、さまざまなレベルの社会環境の変化は、保護者の子育てに関する意識と行動に影響を与えていることが考えられます。より詳細な分析について2008年5月に刊行予定の報告書にてご報告いたします。

調査企画・分析メンバー

樋田大二郎 (青山学院大学教授)
山岡テイ (情報教育研究所所長)
木村敬子 (聖徳大学教授)
櫻井茂男 (筑波大学教授)

Benesse教育研究開発センター

木村治生 (Benesse教育研究開発センター教育調査室室長)
邵 勤風 (Benesse教育研究開発センター研究員)
河村洋子 (Benesse教育研究開発センター研究員)

※所属・肩書きは、刊行時のものです。

『第3回子育て生活基本調査報告書』(仮)は2008年5月刊行予定です。

本調査の詳細な報告書は2008年5月に刊行する予定です(170頁程度、頒価1,000円)。報告書をご希望の方は、Benesse教育研究開発センターのWEBサイトの「報告書の申し込み」より、必要事項をご入力ください。発刊次第、お届けいたします。なおこの報告書は書店ではお買い求めになれません。直接、Benesse教育研究開発センターにお申し込みください。

Benesse教育研究開発センターで実施している各種調査結果は、
<http://benesse.jp/berd/> または で検索できます。

「第3回子育て生活基本調査」速報版

発行日:2008年3月6日 発行人:新井 健一 編集人:木村 治生
発行所:(株)ベネッセコーポレーション Benesse教育研究開発センター